

白藍塾オリジナル

2017入試小論文分析&解答のヒント

2017年4月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

●慶応・文学部

課題文は、文化人類学者のエッセイ。タンザニアの焼畑農耕民の生計維持のしつみを題材として、人間と「時間」とのさまざまな関係性を考察した文章と言えるだろう。決して難しい文章ではないが、扱われている題材自体になじみがない上に、話題がどんどん変わっていくので、論の流れをつかむのがたいへんかもしれない。

課題文を簡単にまとめると、次のようになる。

「タンザニアの焼畑農耕民トングウェ人は、客に食物を分け与え、自分たちの分が足りなくなれば他の集落に乞いに行く。それは、分け与えない者への妬み、呪いを畏れるからだ。こうした生計維持のしつみは、資本主義経済においては、不健全で抑圧的なものと思われるかもしれない。だが、じつは、『時計の時間』に支配されている現代人と違って、彼らは自然や社会との関係の中で時間を巧みに操りながら、他者の妬みをかわしつつ、社会関係をやりくりしているのだ」

設問Ⅰは、課題文の要約問題。先ほどまとめたような内容を、字数に合わせて説明するとよい。課題文は、掛谷誠や内山節といった人の学説を借りながら論を進めているが、そうした学説の紹介そのものが主旨の文章ではないので、筆者の言いたいことに合わせてポイントだけ抜き出してまとめることが大切だ。

設問Ⅱは、「分け与える」ことについての自分の考えを述べることが求められている。昨年度以上にシンプルな設問だが、やはり課題文のメインテーマを踏まえて論じるのが基本だ。

筆者は、資本主義の論理に支配された現代人のあり方と対比しつつ、「分け与える」こと、そしてそれを通して構築される互恵的な社会関係のあり方に積極的な意義を見出していると考えられる。それを踏まえて、「分け与える」ことにもう一度積極的な意義を見出すべきかどうかを問題提起するのが、書きやすいだろう。

とはいっても、これに反論するのは難しいので、イエスの立場に立って、「分かち合い」の現代的な意義を具体的に論じるのが正攻法だ。もちろん、モノの分かち合いに限定して考える必要はないので、アプローチのしかたはさまざまに考えられる。現代社会は、個人主義の浸透、地域共同体の解体、排外主義、格差の拡大、知的所有権の厳格化などなど、「分かち合い」を可能にする社会とはむしろ逆方向に進んでいるとも考えられるので、そうした現代社会の問題点と絡めて論じると、説得力のある内容になるかもしれない。

いずれにせよ、課題文のメインテーマを踏まえてさえいれば、論の内容自体はかなり自由に考えてよいだろう。とはいえ、論を深めるだけの字数の余裕はないので、独創性をアピールするよりは、課題文のテーマをしっかりと理解していることを示すつもりで書くのが先決だ。

出題形式や各設問の字数はここ数年と同じ、文化論を主題とした課題内容も昨年度と似ているので、しっかりと準備をしてきた受験生は、それほど難しいとは感じないだろう。

©執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179) <http://www.hakuranjuku.co.jp>